

平成23年度かながわの遺跡展・巡回展



*Kanagawa Prefecture in the Yayoi Period*

# 弥生時代の かながわ

移住者たちのムラと社会の変化

神奈川県教育委員会  
〔埋蔵文化財センター〕

神奈川県立歴史博物館

／ 小田原市教育委員会

／ 厚木市教育委員会

## ごあいさつ

今からおよそ 2,200 年前の弥生時代中期中ごろ、小田原市の低地に突如大規模な集落が出現しました。本格的な稲作農耕技術を携えて近畿地方から移住してきた開拓者たちが深く係わったムラ、中里遺跡です。その後、南関東全体に本格的農耕集落が次々と出現しましたが、後期になると神奈川県域では遺跡数が激減します。しかし、三浦半島の先端にある三浦市赤坂遺跡は、海を通じた他地域との交流を背景に大規模な集落を維持し続けました。また、綾瀬市神崎遺跡は、遺跡数が激減した時期に、現在の愛知県東部～静岡県西部地域から訪れた入植者のムラであることがわかりました。

この展示では、かながわの弥生社会を切り拓いた、これら 3 遺跡を中心に、他地域からの人々の移住と在地の弥生社会の変化を示す遺跡や遺物を紹介し、弥生時代のかながわについて解説します。

平成 24 年 1 月

神奈川県教育委員会  
神奈川県立歴史博物館  
小田原市教育委員会  
厚木市教育委員会

## 目次

|                     |    |
|---------------------|----|
| はじめに                | 01 |
| I かながわの弥生時代の始まり     | 02 |
| II 最初の本格的稲作集落－中里遺跡－ | 04 |
| コラム 顔               | 09 |
| III 海洋交流の一大拠点－赤坂遺跡－ | 10 |
| コラム 謎の祭祀具 有角石器      | 16 |
| IV 北との海路－間口洞窟の燕形銚頭－ | 17 |
| V 東海からの入植者のムラ－神崎遺跡－ | 19 |
| VI 共通する世界観－絵画土器－    | 27 |

## 例言

1. 本冊子は、平成 23 年度かながわの遺跡展・巡回展『弥生時代のかながわ－移住者たちのムラと社会の変化－』の展示図録です。
2. 本展は、神奈川県教育委員会（神奈川県埋蔵文化財センター）、神奈川県立歴史博物館、小田原市教育委員会、厚木市教育委員会が主催するものです。
3. 展示構成、展示内容と本図録の内容は同一ではありません。
4. 展示会場と会期は次のとおりです。  
神奈川県立歴史博物館  
平成 24 年 1 月 8 日（日）～2 月 12 日（日）  
小田原市郷土文化館  
平成 24 年 2 月 18 日（土）～2 月 26 日（日）  
厚木市郷土資料館  
平成 24 年 2 月 29 日（水）～3 月 11 日（日）
5. 会期中、講演会を次のとおり行います。  
神奈川県立歴史博物館 講堂  
第 1 回 1 月 15 日（日）「関東の弥生時代はどのように始まったか？」明治大学文学部 教授 石川日出志 氏  
第 2 回 1 月 29 日（日）「神崎遺跡から学ぶ弥生時代後期」伊勢原市教育委員会文化財課 副主幹 立花 実 氏  
報徳博物館 講堂  
2 月 25 日（土）「中里遺跡で何が起こったのか」小田原市文化財課 副課長 大島慎一
6. ポスター・図録表紙等のデザインは剣持章生（SHIROKUMA DESIGN）が行いました。
7. 企画及び図録の作成は、小田原市教育委員会（担当：小田原市郷土文化館 田中里奈）、厚木市教育委員会（担当：文化財保護課 佐藤健二）、神奈川県立歴史博物館（担当：学芸部 近野正幸）の協力を得て、神奈川県教育委員会文化遺産課中村町駐在事務所〔神奈川県埋蔵文化財センター〕（御堂島正・砂田佳弘・伊丹 徹（担当）・恩田 勇・井澤 純・千葉 毅（図録デザイン・編集）・上田 薫・矢内昭夫・阿部 進・桜木敦子・大河内弘子）が行いました。

# はじめに

弥生時代とは、今から2千数百年前から1700年前頃までの時代をいいます。弥生時代は、<sup>すいとこうさく</sup>水稲耕作（<sup>かんがい</sup>灌漑施設を伴った水田での稲作）を生業の中心とした文化によって特徴づけられます。この文化の成立には、朝鮮半島から日本列島に渡って来た人たちが大きな役割を果たしました。石器中心の道具立てから金属器に転換してゆくのもこの時代の中で起こった重要なできごとです。一部の地域で階層化が進んだり、本格的な戦争が行われるようになるという重要な社会の変化も起こっています。

弥生時代は大きく前期・中期・後期の3時期に分けられ、前期をI期、中期をII・III・IV期、後期をV期と細分するのが一般的です（最終末をVI期とする場合もあります）。前期の前に早期（先I期）をおく考え方もありますが、かながわの弥生時代は、前期の後半から始まります。ここではI～V期という区分で話を進めます。

弥生時代早期を認める立場ですと、その範囲は北部九州にほぼ限定されます。弥生時代前期から弥生時代とする立場ですと、その範囲は西日本から伊勢湾以西と日本海沿岸に点々と認められる遺跡までということになります。中期にいたって弥生文化は、東北地方北部までに及ぶようになりますが、その内容は地域ごとに特徴あるものとなります。このことから、弥生文化は多様性が強いとも言われます。その広がりとは多様性は、人の移動と各地域の環境や伝統との融合を反映したものとも捉えられます。

当時の最大の移動手段は舟でした。弥生文化の伝わり方は、徒歩によって少しずつ広がるだけでなく、短期間で<sup>えんかくち</sup>遠隔地にも伝わるがあります。かながわにも各地から人々がやって来た形跡が残っています。また、他地域と往来した人々もいたことでしょう。これらの人々が多く知見や技術をもたらし、地域社会に大小の変革を生じさせたと考えられます。

本展示では、最初の本格的農耕集落・小田原市中里遺跡、海を背景として大集落を維持した三浦市<sup>あかさか</sup>赤坂遺跡、東海からの移住者のムラ・綾瀬市<sup>かんざき</sup>神崎遺跡を中心に、かながわの弥生文化の地域性と変化を考えてみたいと思います。

0-1 | 略年表

| 略年代              | a | 前400   |  | 前300 | 前200   |    | 前100 |     | 1  | 100    |     | 200 |     | 250  |        |
|------------------|---|--------|--|------|--------|----|------|-----|----|--------|-----|-----|-----|------|--------|
|                  | b | 前300   |  |      | 前200   |    | 前100 |     | 1  | 100    | 200 |     | 250 |      |        |
| 時代               |   | 弥生時代前期 |  |      | 弥生時代中期 |    |      |     |    | 弥生時代後期 |     |     |     | 古墳時代 |        |
| 時期区分             |   | I      |  | II   | III    |    | IV   |     |    | V      |     |     | VI  |      |        |
|                  |   | 後半     |  | 前葉   | 中葉     |    | 後葉   |     |    | 初頭     | 前半  | 後半  | 末   |      |        |
| 主な土器型式           |   | 矢頭     |  | 堂山   | 三ヶ木    | 平沢 | 中里   | 宮ノ台 |    |        | 久ヶ原 |     | 弥生町 | 前野町  |        |
| 展示に登場する主な遺跡または盛期 |   | 矢頭     |  | 上村   |        | 中里 | 子ノ神  | 砂田台 | 折本 | 下寺尾    | 赤坂  | 神崎  | 子ノ神 | 本郷   | 三ノ宮・前畑 |
|                  |   | 主要な展示品 |  |      |        |    |      |     |    |        |     |     |     |      |        |

\* 前期の前に早期（先I期）をおく考えもある。

\* 略年代 a：較正暦年代 b：従来の年代観による年代

\* 早期：前8世紀前葉～前6世紀頃 前期：前6世紀頃～前4世紀中葉

中期：前4世紀末葉～紀元前後頃 後期：1世紀前葉～3世紀前葉 とする寒冷化と砂丘形成にもづく甲元真之説もある（甲元2011）。







I-2 | 神奈川県で最古の粉圧痕をもつ土器  
上村遺跡出土。I期。  
残存する高さ 25.1cm。

I-3 | 土器の内面  
粉圧痕が複数個所に確認できる。  
(○の部分)

I-4・5 | 粉圧痕の拡大写真  
粉の特徴（<sup>えい</sup>穎・<sup>のぎ</sup>芒）が明瞭に残っている。  
安藤広道氏提供。  
4の全長 6.8mm、5の全長 6.3mm



I-3

I-2



I-4



I-5

I-6 | 上村遺跡遠景  
写真中央の土が露出している部分が調査区。  
丘陵地に立地する様子が分かる。



I-6



## II 最初の本格的稲作集落 —中里遺跡— 〔Ⅲ期〕

これまで、弥生文化を特徴づける<sup>かんごう</sup>環濠集落・<sup>ほうけいしゅうこうぼ</sup>方形周溝墓・水田・大陸系磨製石器・青銅器・鉄器という要素は、南関東ではⅣ期に出そろい、ここから本格的な農耕社会に入るとされてきました。

ところが近年、これらの諸要素のいくつかがⅢ期にさかのぼって発見されるようになってきました。とりわけ小田原市中里遺跡からは西日本特有の遺構・遺物や102軒もの<sup>なかざと</sup>竪穴住居が発見され、西日本と同じような本格的な水稲耕作を行った大集落であることがわかり、東日本の弥生時代像を再考しなければならないほどの衝撃を与えました。



II-1



II-2



II-3



II-4

II-1 | 中里遺跡第Ⅰ地点

II-2 | 中里遺跡の大きな掘立柱建物  
10mを超える大きな建物跡である。

II-3 | 中里遺跡の竪穴住居

II-4 | 中里遺跡の井戸  
弥生時代の井戸は近畿地方によくみられるが、関東地方では珍しい。

II-1~4 は玉川文化財研究所提供。

## 中里遺跡 小田原市中里

中里遺跡は、酒匂川の左岸、現在の海岸線から1.5kmの低地（標高約10m）に立地しています。1952年に石野瑛、1956年に明治大学による小規模な発掘調査が行われ、1992年に第III地点と第II地点、1999～2000年に第I地点が発掘調査されました。

### 方形周溝墓群の発見

方形周溝墓は、埋葬施設の四方に溝を掘って区画した弥生時代に主流となる墓の形態です。I期後半に近畿地方で成立し、南関東ではIV期から一般化するとされています。

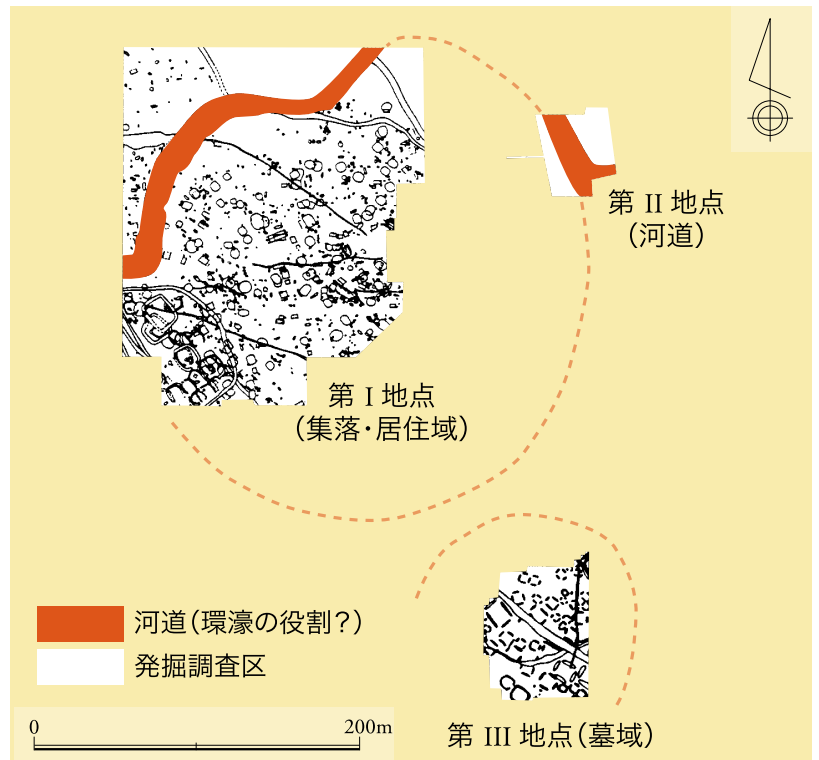
ところが、中里遺跡第III地点の発掘調査では、III期に属する県内最古の方形周溝墓群が発見され、しかも40基以上も密集していたのでした。南関東では千葉県向神納里遺跡につぐ、千葉県常代遺跡群や埼玉県小敷田遺跡のものと同じくらい古いものでした。溝の四隅が切れる形状から、伊勢湾沿岸地域との関係が深いのではないかと考えられています。中里遺跡が注目されたきっかけとなりました。

### 見慣れない遺物と遺構

第III地点は墓域であったことから近隣に居住域＝集落の存在が予想されていましたが、第I地点の発掘調査で大規模な集落跡の存在が確認されました。集落跡からは東日本のIII期としては、それまでの常識をくつがえすような遺構や遺物が次々と現れました。

竪穴住居は102軒も発見されています。III期中里遺跡の存続期間は、土器型式の検討などから約100年と見込まれ、およそ3時期に細分されることから、30軒前後の竪穴住居が同時に存在していたと推定されます。そうすると1軒に5人が住んでいたとして、集落全体では150人となります。当時あって、一時期に100人を超える人が集住する大集落は、東日本でもこの遺跡だけのことだったかもしれません。

さらに、注目されるのは、多数の掘立柱建物です。掘立柱建物はIV期以降の大きな集落でも数棟しか認められず、規模も柱穴が4本の1間×1間や6本の1間×2間の小規模なものに限られています。しかし中里遺跡では50棟以上の掘立柱建物が確認され、その中には2間×8間(4.4m×9.6m)で棟持柱をもつ大規模なものまでみられます。この大規模な建物は集落のほぼ中央に位置していることから、神殿、集落全体で管理した穀類の倉庫、共同作業場、あるいは中心的人物の住居など特別な性格をもった建物と考えられます。



II-5 | 中里遺跡の全体模式図  
戸田哲也氏原図。



また、近畿地方ではよくみられる井戸が発見されたことも西日本との関連をうかがわせます。

集落の西から北側には蛇行する河道（河川の跡）が発見され、集落の周囲を取り巻く濠（環濠）の役目を果たしたのではないかと考えられています。また、集落の北東側には居住地を区画したと考えられる溝が掘られています。これらも新しい集落形態の要素です。

居住域は第I地点のさらに東・南方向に広がると考えられ、全体ではおよそ4万㎡になります。これは、次のIV期の多くの環濠集落が2万㎡前後であることと比べても桁外れに大規模なものと言えます。

## 中里遺跡の土器

遺跡からの出土遺物のほとんどは土器です。多くの在地(地元)の土器(中里式土器)のなかに、西日本を主体として、各地の土器が含まれていました。この集落の始まりには、何らかの形で西日本を始めとした各地域の人々が関係していたと考えられます。



尾張北部

播磨・摂津

伊勢湾周辺



### II-6 | 中里遺跡出土の土器

写真の土器はすべて中里遺跡からの出土。かながわの土器だけでなく各地の様相を示す土器が出土している。

## 西日本の土器

### 玉津田中遺跡 兵庫県神戸市

中里遺跡から見つかった土器と、よく似ている土器が出土している兵庫県玉津田中遺跡をみてみましょう。

玉津田中遺跡では、主にII～IV期の時期に、旧明石川を挟む微高地上の2万㎡以上にわたって大規模な集落が営まれました。この遺跡のIII期における主要な土器の構成は右図のとおりです。

中里遺跡からは、図の広口壺や甕によく似た土器が出土しています。これらが特に選ばれて、中里遺跡に運び込まれた可能性があります。



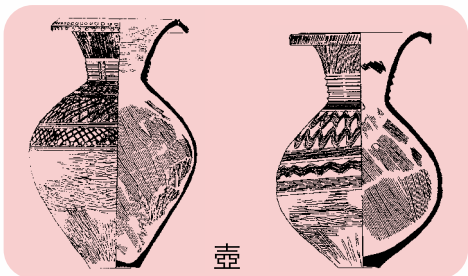


南東北

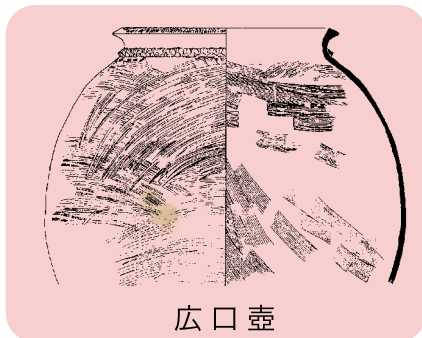
北関東

信濃

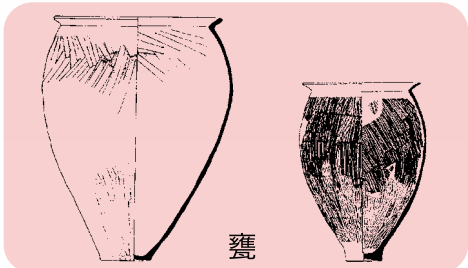
かながわの土器



壺



広口壺



甕



鉢



高坏

II-7 | 玉津田中遺跡の土器の構成

## 中里遺跡の石器

中里遺跡からは、農耕具である大型の石鍬<sup>いしぐわ</sup>が見つっています。また、大陸系磨製石斧と呼ばれる斧類<sup>ふとがたはまぐりぼ</sup>（太型蛤刃石斧<sup>ちゅうじょうかたぼ</sup>=伐採斧、柱状片刃石斧・扁平片刃石斧<sup>へんぺいかたぼ</sup>・ノミ状小形石斧=加工斧）も出土しており、木製農耕具を製作していたことが推測されます。

太型蛤刃石斧を作るには、石材をコツコツと打撃して少しずつ形を整え、砥石で仕上げる必要がありますが、打撃に用いた石のハンマーが出土しており、遺跡内で石斧を作っていたことがわかります。

注目されるのは、大阪府と奈良県境にある二上山<sup>にじょうざん</sup>や香川県五色台<sup>ごしきだい</sup>・金山<sup>かなやま</sup>などでとれるサヌカイトという石材を用いた石鍬<sup>せきぐわ</sup>（やじり）や石剣が発見されたことです。かながわでは手に入らない石材で作られていることから確実な搬入品ということが出来ます。

II-8 | 大陸系磨製石斧



II-9 | ハンマー

石斧を作るための道具。

II-8

II-10 | サヌカイト製の石器

石鍬と石剣。石剣は上下が欠けている。



II-9

II-11 | 巨大な石鍬

全長 47.5cm。



II-10



II-11

## 中里遺跡の木製品

第Ⅲ地点の西から北側にある河道からは、水づけの状態であったため、そこに捨てられた木製品が朽ちることなく残っていました。写真右の鍬は、刃など薄い部分は残っていませんでしたが、柄を挿入するため厚くしてある船形隆起部<sup>ふながたりゅうきぶ</sup>は見事に残存しています。写真左も、鍬の膝柄<sup>ひざえ</sup>で、上端に紐かけの痕跡がみられます。



II-12



II-13

II-12 | 鍬の膝柄

II-13 | 鍬

## 本格的農耕集落中里遺跡とその終わりの謎

環濠の役割を果たした河道や居住地を区画する溝、多数の竪穴住居や掘立柱建物と中央部の長大な掘立柱建物、井戸、方形周溝墓からなる墓域などの遺構群と、西日本の土器や石器の存在、大陸系磨製石器や木製農耕具などの遺物群で示されるように、中里遺跡は西日本から新たな集落形態と本格的な農耕技術を取り入れ、彼の地から訪れた人々と丘陵部に居住していた在地の人々が集住して作ったかながわ最初の本格的農耕集落と考えられます。

中里遺跡は、Ⅲ期末をもって廃村になり、この地での人々の生活の痕跡はみられなくなります。この遺跡がなぜ廃絶されたのか、人々はどこにいったのかはよく分かっていませんが、中里遺跡がさきがけとなった水稲耕作を中心とした本格的農耕社会は、その後、Ⅳ期前半の集落減少期を経て、各河川流域に広がっていくことになります。

### コラム 顔

中里遺跡から土偶形容器（容器形土偶）の顔の部分が出土しました。関東地方における類例は、埼玉池上遺跡いけがみにあり、中里遺跡と同じⅢ期のものです。これらは縄文時代晩期ほうひげの髷まげを表現したとされる有髷土偶ゆうぜんや、黥いれずみを表現したとき

れる黥面土偶げいめんに系譜をたどることができ、伊勢湾以東の東日本に広く分布します。

また、土器（特に壺）の最上部に顔を表現した人面土器は、関東のⅡ～Ⅳ期に特徴的なものです。人面土器の顔の部分をつつそうり

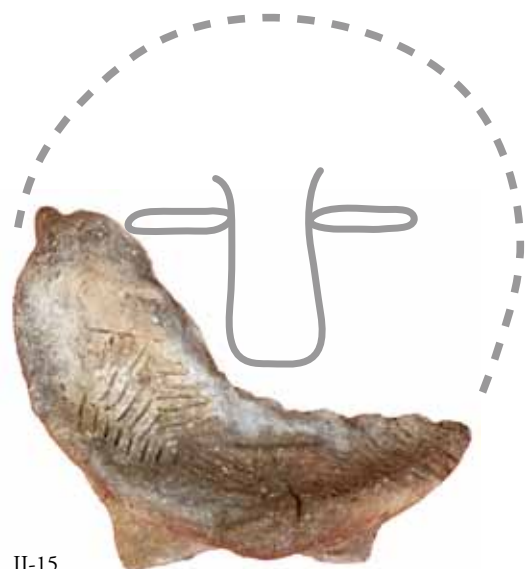
アルに表現したことで知られるのが、横須賀市ひる畑遺跡ぼたけの土器です（Ⅲ期）。丁寧に作られた顔は壺の上部にあたり、頭頂部は開いていたと考えられます。

II-14 | ひる畑遺跡出土の「顔」

II-15 | 中里遺跡出土の「顔」  
点線は推定復元。



II-14



II-15



### Ⅲ 海洋交流の一大拠点 —赤坂遺跡—〔Ⅳ・Ⅴ期〕

#### 南関東の弥生文化の盛期

南関東においては、「弥生文化」としてイメージされる要素のほとんどがⅣ期に色濃く現れています。

Ⅳ期の南関東には、多少の地域色をもちつつも宮ノ台式土器が広く分布します。宮ノ台式土器は大きく5段階に変遷し、かながわの遺跡は1～3段階（Ⅳ期前半）には少なく、4・5段階（Ⅳ期後半）に多くなることが明らかにされています。中里遺跡という大きなインパクトはあったものの、そのまま継続的に人々が農耕集落を営むことが常態とはならなかったようです。

しかし、Ⅳ期後半になると県内のいたるところに集落がみられるようになります。特に鶴見川の中・上流域には、大塚遺跡のような環濠集落が点々とつくられます。その周囲には方形周溝墓が群在する墓域が設けられ、遺跡からは大陸系磨製石器や、時には鉄器が出土します。本格的な稲作農耕社会へと急展開したと考えられます。

#### 赤坂遺跡 三浦市初声町下宮田 国指定史跡

赤坂遺跡は、Ⅳ・Ⅴ期の拠点的な集落跡です。三浦半島の先端ちかくに位置します。遺跡の最高点は標高50m余あり、西は相模湾越しに伊豆半島・富士山を、東は東京湾を隔てて房総半島を眺望することができます。遺跡の重要性から、その一部が2011年3月に国の史跡に指定されました。

赤坂遺跡が県内の他の遺跡と比べて大きく異なっているのは、多くの遺跡がⅣ期で廃絶されⅤ期に継続しないのに対して、逆にⅤ期でさらに隆盛することです。

赤坂遺跡は発掘調査により、7万㎡という関東でも有数の規模を誇る遺跡であることが確認されました。竪穴住居も170軒ほど検出され、床面積が100㎡を優に超える大形住居も複数認められます。

遺物としては、長野県北部地域でよく用いられる石材でつくられた太型蛤刃石斧、大形板状鉄斧、鉄剣、鉄製釣針、銅環（指輪状の装身具）などが出土しており、他地域との交流が盛んであったことを示しています。また、土器のなかには房総半島地域に特徴的な文様をもつものがあり、海を通じた交流を推測させるものです。

III-1 | 調査中の赤坂遺跡  
三浦市教育委員会提供。

III-2・3 | 大陸系磨製石斧  
2は扁平片刃石斧(右下はノミ状片刃石斧)、3は太型蛤刃石斧。

III-4 | 鉄剣

III-5 | 鉄釣針

III-6 | 磨製石剣

III-7 | 骨製ピン

III-8 | 銅環



III-1

大陸系磨製石斧や大形板状鉄斧は農耕地を拓くための伐採や木製農耕具の製作に用いられたものであり、水稲耕作を基盤としていたと考えられますが、鉄製釣針の存在からみて、海に面した立地を活かした海産資源の獲得も行っていたようです。三浦半島に多い海蝕洞窟を利用した漁業集団とも密接な関係があったと推定されます。

赤坂遺跡が大規模な集落を維持しながらV期まで継続したのは、水稲耕作とともに、海を通じた他地域との交流と海産資源の活用があったものと考えられます。



III-2



III-3



III-4



III-6



III-7



III-5



III-8



## 河原口坊中遺跡 海老名市河原口

河原口坊中遺跡は、相模川左岸の自然堤防上に営まれた遺跡で、住居址がある微高地の間を縫うように河道が認められます。IV期・V期の河道から大量の木製品が出土しました。

IV期の河道は、地面から5mも下から発見されたもので、常時滞水していたことから木製品が良好な状態で残っていました。木製高杯は、逗子市池子遺跡群で数点出土しただけで、たいへん貴重な例です。脚台部の柱や底の部分に丁寧な細工が施されています。火を起こすのに使用した火鑽臼は、県内では最古の出土例です。また、背負子の部品とも考えられる木製品や叉鋤がみつかっています。この遺跡では、台地上の遺跡では腐って残らない、当時の社会を支えた豊かな道具類の数々を知ることができます。

III-9-11 | 木製の高杯

III-12 | 木製高杯の出土状況  
かながわ考古学財団提供。



III-9



III-10 | 段の削り出し痕



III-11 | 底部の細工



III-12





III-13



III-13 | 大量に出土した木製品  
 叉鋤や背負子もみえる。  
 かながわ考古学財団提供。

III-14 | 木製の背負子

III-15 | 木製の叉鋤  
 点線は推定復元。

III-16 | 火鑽白

**池子遺跡群** 逗子市池子

逗子湾から2kmほど入った池子川に注ぐ谷と、それを取り巻く丘陵部に位置します。遺跡が本格的に展開するのはIV期からで、近現代にまで至る複合遺跡です。旧河道から木製品をはじめとする多量の有機質遺物(ゆうきしつ)が出土しました。特に木製農耕具は未成品の数も多く、この地で製作していたことがわかります。また、鹿角などを用いた骨角器も様々なものがあります。海浜に近いこともあり、銚頭(もりがしら)・ヤス先や釣針もみられます。占いに用いた鹿の肩甲骨製(けんこうこつ)の卜骨(ぼっこつ)も複数出土しました。IV期の鉄製品は発見されませんでした。鹿の角で作られた、剣の柄である「Y字形剣把(じがたけんば)」とその未成品があることから、鉄製品があったことは明らかです。



III-17

III-17 | Y字形剣把

## 倉見才戸遺跡 寒川町倉見

相模川下流左岸の<sup>めくじり</sup>目久尻川との間の丘陵上に位置し、IV期とV期にやや位置を変えて環濠集落がつけられました。第1次調査で発見された20軒の竪穴住居の中で、Y-6号・Y-16号住居址は特に遺物が豊富でした。Y-6号からは精巧な作りの高坏や磨製石斧、有角石器、そして出土例が非常に少ない<sup>やりがんな</sup>鉋（木の表面を削る鉄製の工具）がみつっています。Y-16号からは首飾りとした直径1.5～3.0mmの細い管玉が59点出土しました。一緒に出た<sup>ひすい</sup>翡翠の<sup>まがたま</sup>勾玉と組み合わせると写真のようになります。



III-18 | 精巧な作りの高坏



III-19 | 鉄器  
左は鉋、右は鉄斧



III-20 | 翡翠と管玉の首飾り

## 三殿台遺跡 横浜市磯子区岡村 国指定史跡

急峻な崖に囲まれた丘陵の頂部全体に縄文時代から古墳時代の遺構が広がっています。中でも中心となるのは弥生時代で、IV・V期の竪穴住居は150軒以上もあり、赤坂遺跡と同じようにV期になっても継続して営まれています。また、巨大な竪穴住居があることでも共通しています。

東日本では、イネの穂を摘む道具である石庖丁<sup>いしぼうちよう</sup>が出土する地域（福島や宮城など）と、ほとんど出土しない地域があります。かながわは出土しない地域の代表ですが、この遺跡から出土した石器の中に石庖丁の可能性が高い石器があります。典型的な石庖丁の形はしていませんが、他地域の石庖丁同様、上部の2箇所<sup>ひも</sup>に紐をかけるための穴がみられます。鉄製穂摘具<sup>ほづみぐ</sup>や鉄鎌<sup>てつがま</sup>が普及する以前に、かながわではどんな道具でイネを収穫していたのかまだ分かっていません。

III-21 | 現在の三殿台遺跡整備され公園になっている。横浜市三殿台考古館が隣接する。

III-22 | 石庖丁状石器の紐孔部分の拡大

III-23 | 石庖丁状石器



III-21



III-22



III-23



## IV期を彩るもの

弥生時代の特徴は、① 水稲耕作、② 金属器の使用、③ 大陸・半島との本格的交渉の三点と言われてきました。そしてその文化内容は、

**A 縄文時代から継承したもの**

**B 大陸・半島に系譜が求められるもの**

**C 弥生時代になり独自に発達したもの**

の三者があると言われます。

IV期には、西日本でみられる文化要素の多くが東日本でも確認されるようになります。上記の分類をかながわに限定して考えてみると、

**a 東日本の縄文時代からの伝統を引継ぐもの**

**b 西日本からもたらされたもの（その起源が大陸・朝鮮半島か西日本なのかを問わない）**

**c 東日本で独自に発達したもの**

に分けられます。また、

**d1 西日本では通有でも受入れなかったもの**

**d2 一旦受入れてもすぐ廃れてしまったもの** もあります。

aには竪穴住居や一部の伐採斧があります。狩猟や漁撈の技術など、日常生活にかかる多くのことはここに収まるでしょう。

bには方形周溝墓が挙げられ、その結果、再葬墓が姿を消します。大陸系磨製石斧は西日本の面影をかすかに残す程度にまで変容しています。秦野市<sup>すなだだい</sup>砂田台遺跡のように多量の石斧が出土した遺跡でも、選りすぐりの精巧品を除けば、付近の川原石を研磨して作った製品が多く、ところどころに<sup>れき</sup>礫の自然面を残しています。厚木市<sup>みや さと</sup>宮の里遺跡でも同様ですが、珍しい例として、素材を本来の鉄ではなく石に代えて作った<sup>か</sup>戈（武器）が出土しています。

cは、後述する有角石器などがあります。

d1の代表は銅鐸です。かながわを含めた東日本の多くの地域は銅鐸の祭祀を受け入れませんでした。d2には長大な掘立柱建物や井戸などがあります。

西日本では幾度か大きな戦乱があったようですが、その緊張感は伝わってきたとしても、実際の騒乱まで波及してきたのかは疑問です。



III-24 | 砂田台遺跡の磨製石斧類



III-25 | 宮の里遺跡の磨製石斧類



III-26 | 砂田台遺跡の竪穴住居



III-27 | 砂田台遺跡の方形周溝墓



青銅器や鉄器の関東への流通が始まるのもIV期です。砂田台遺跡は、多くの鉄製品が出土したことで知られていますが、その中に鉄剣を三つに折って、それぞれ斧やノミに再加工したものがあります。この鉄剣は、刃は関ま双孔そうこうといい、東日本で多くみられる茎なかご近くに二つの穴をあけたものです。

関東での玉作は、古墳時代前期にならないと行われません。銚子付近に流れ着いたであろう琥珀こほくを用いて玉作を行っている千葉県椎津茶ノ木遺跡の弥生時代の事例が唯一の例外です。島根から新潟にかけての日本海側に玉作の拠点があったようで、翡翠製の勾玉へきぎよくや碧玉・鉄石英製の管玉てつせきえいくだたまなどがかながわに持ち込まれています。茅ヶ崎市下寺尾西方A遺跡からは、勾玉の未完成品らしい石製品が出土しています。



III-28 | 鉄剣を転用して作った鉄斧  
砂田台遺跡出土。



III-29 | 勾玉未完成品  
下寺尾西方A遺跡出土。



III-30 | 石のか戈  
宮の里遺跡出土。

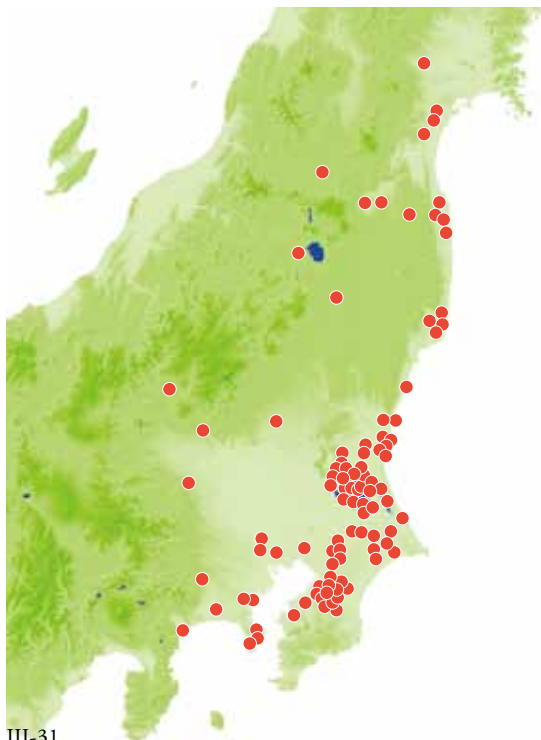
## コラム 謎の祭祀具 有角石器

有角石器ゆうかくし（足洗型石器あしあらいし）と呼ばれる、角のように尖った突起をもつ石器があります。これは、茨城・千葉を中心にして、東日本に限って分布します。その時期や用途については、千葉県足洗村（現在の旭市）で発見された1911年から論争が続いています。時期につい

ては、一部V期まで残りますが、ほとんどはIV期であることがわかりました。しかし、用途については何らかの祭祀に用いたという以外は、諸説が並立したままです。また、近い性格を持つものとして環状石器（環状石斧）や、その一部を削り取った多頭石器（多頭石

斧）が知られていますが、これも信濃や飛騨をはじめ東日本に偏って分布します。

西日本には銅鐸の祭がありました。有角石器はそれに対峙する東日本の祭の道具だったのかもしれませんが。



III-31



III-32



III-33

III-31 | 有角石器の分布  
茨城、千葉を中心に分  
布する。岡本孝之氏原図。

III-32・33 | 有角石器  
32は三殿台遺跡出土、  
33は倉見才戸遺跡出土。



III-34

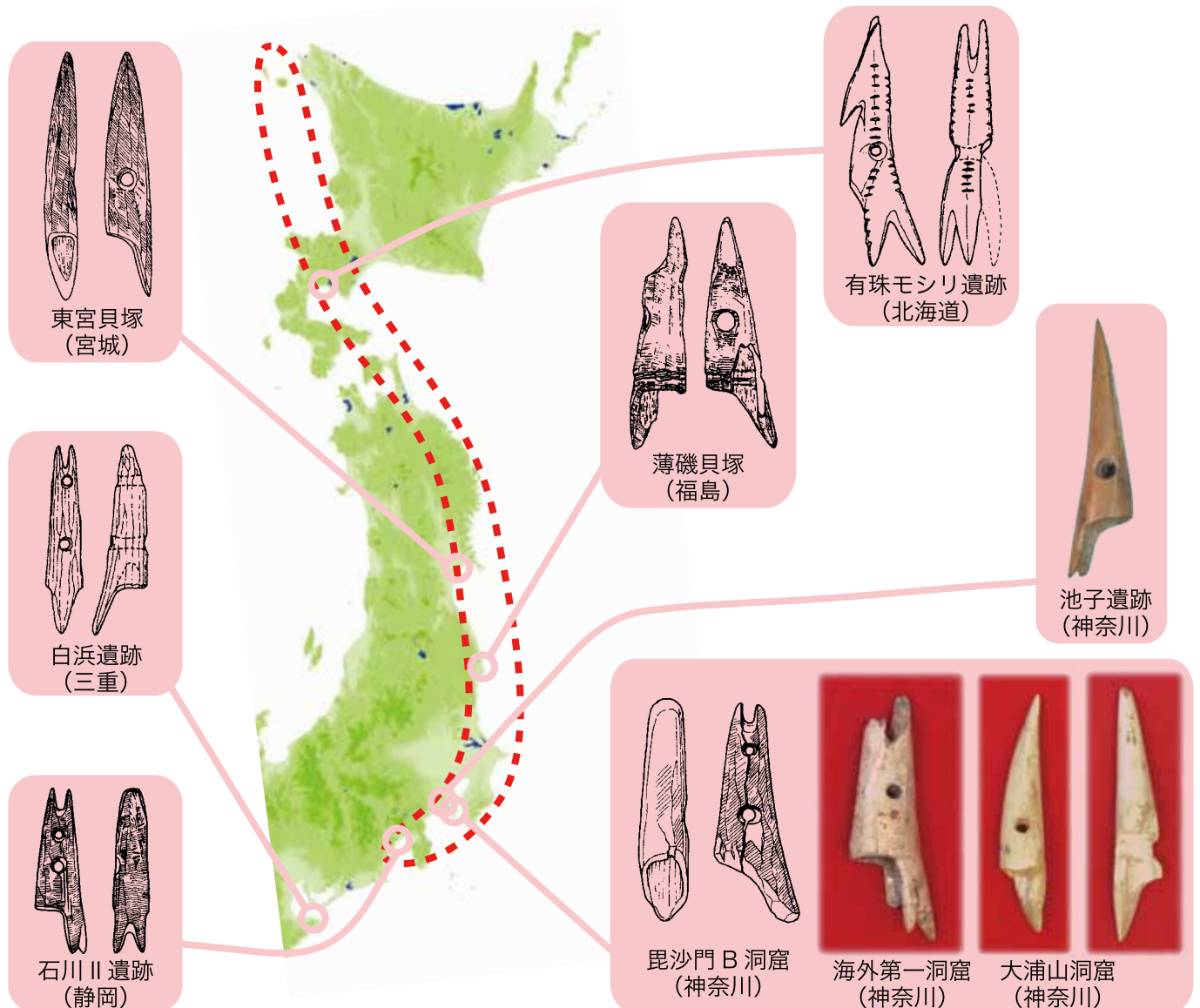
III-34 | 環状石斧  
矢ノ津坂遺跡出土。

## IV 北との海路 —間口洞窟の燕形銚頭—

弥生文化といえば水稲耕作と思われがちですが、もちろんそれだけではありません。人々は暮らしの拠点とする地域の資源を貪欲なまでに有効活用しようとし、野や山の資源、川の資源、そして海の資源です。狩猟・採集・漁撈は常に水稲耕作と補完関係にあり、地域や時期によってウエイトの置き方に違いがあったのです。

縄文時代晩期に太平洋岸の岩手・宮城・福島では独特な銚頭を用いた漁撈が発達します。この銚頭は、回転離頭銚頭といます。棒の先にこの銚頭を装着し、獲物に向かって打ち込みます。銚頭には綱が通してあり、これを引くと銚頭は獲物の体内で90度回転するので、抜けにくくなり、手繰り寄せやすくなります。対象となった獲物は、大形回遊魚や海獣と考えられています。この銚頭は、燕の尾に似た形状をとることから燕形銚頭とも呼ばれます。弥生時代にもこの銚頭は使われ続けるのですが、綱を結ぶための穴の開け方が縄文時代のものと90度異なります。弥生時代の銚頭は側面索孔燕形銚頭と呼ばれ、東北だけではなく北は北海道から南は静岡県まで太平洋岸に広く分布し、類例は伊勢湾にまで及ぶことが明らかにされています。

IV-1 | 燕形銚頭の分布  
北海道の日本海側から本州の太平洋岸、伊勢湾付近にまで広く分布する。設楽博己氏原図。



IV-1



## 間口洞窟 三浦市南下浦町

三浦半島や房総半島の先端には多くの海蝕洞窟<sup>かいしょくどうくつ</sup>があります。海蝕洞窟には縄文時代にさかのぼって使用された痕跡はないことから、弥生時代になってから地盤の隆起によって海上に姿を現したと推測されています。三浦半島の海蝕洞窟から出土する最古の遺物はⅢ期のものです。

間口洞窟は、間口港の山腹に開口しています。Ⅳ・Ⅴ期には住居としても用いられていたようで、多くの骨角器（釣針・銚頭）・貝製品（貝輪・貝庖丁）や卜骨<sup>ぼっこつ</sup>（骨を焼いて占いを行ったもの）などが出土しました。漁撈を主とした生活をうかがうことができます。



IV-2



IV-3



IV-4

IV-2 | 間口洞窟遠景

写真中央の民家裏に位置する。眼前は海である。

IV-3 | 発掘中の間口洞窟

1971-73年に神奈川県立歴史博物館によって発掘調査が行われた。

IV-4 | 洞窟内部の調査

IV-5 | 間口洞窟出土の燕形銚頭



IV-5



## V 東海からの入植者のムラ — 神崎遺跡 — 〔V期〕

IV期後半は、県内各地に環濠集落が数多く作られ、以前に比べれば、弥生社会が隆盛<sup>りゅうせい</sup>を極めるといった状態でした。しかし、V期の初頭に急に遺跡が見られなくなってしまいます。IV期末まで、鶴見川中・上流域には集落群が密集していましたが、V期に至ると小さなムラが散在するような状況に陥りました。

これはIV期末の土器とV期でも古いと考えられていた土器に違いが大きく、その間をつなぐ時期の土器を出土する遺跡がないことから推定されてきました。近年、その間をつなぐ土器が平塚市<sup>ひらつか</sup>真田・北金目<sup>きたかなめ</sup>遺跡などで発見されたことで、やはりV期の初頭には遺跡が少ないことがはっきりしました。なんらかの自然災害が県下を襲ったのではないかという考えもあります。このような状況の中で出現するのが神崎遺跡です。

### 神崎遺跡 綾瀬市吉岡 国指定史跡

<sup>かんざき</sup>神崎遺跡は、相模川の支流である目久尻川左岸の標高 24m ほどの丘陵上にあり、川との比高は 11m ほどです。西方には大山、その奥に富士山を望むことができます。

1989年の発掘調査によって南北 103m、東西 65m、延長距離 270m の楕円形の環濠と 6 軒の竪穴住居が確認されました。注目されたのは、出土土器のほとんどが三遠<sup>さんえん</sup>地域（三河と遠江 現在の愛知県東部から静岡県西部）のものと酷似するものだったことです。

さらに、2010年の追加調査では、環濠内の南側にも竪穴住居があり、竪穴住居からも三遠地域の土器のみが出土しました。

土器のほとんどは三遠地域の形をしていますが、胎土<sup>たいど</sup>（粘土などの材料）は在地のものが多いようです。この時期の三遠地域の土器の特徴は、壺の頸部がくの字に強く折れ曲がっていたり、甕<sup>こうしん</sup>の口唇部へのキザミは面に垂直に入っていること、台付鉢などの器種をもつことなどです。神崎遺跡の土器にもその特徴がはっきりとみられます。ほかに少量ですが、在地の土器（小壺）、東遠江や東京湾岸の土器もあります。

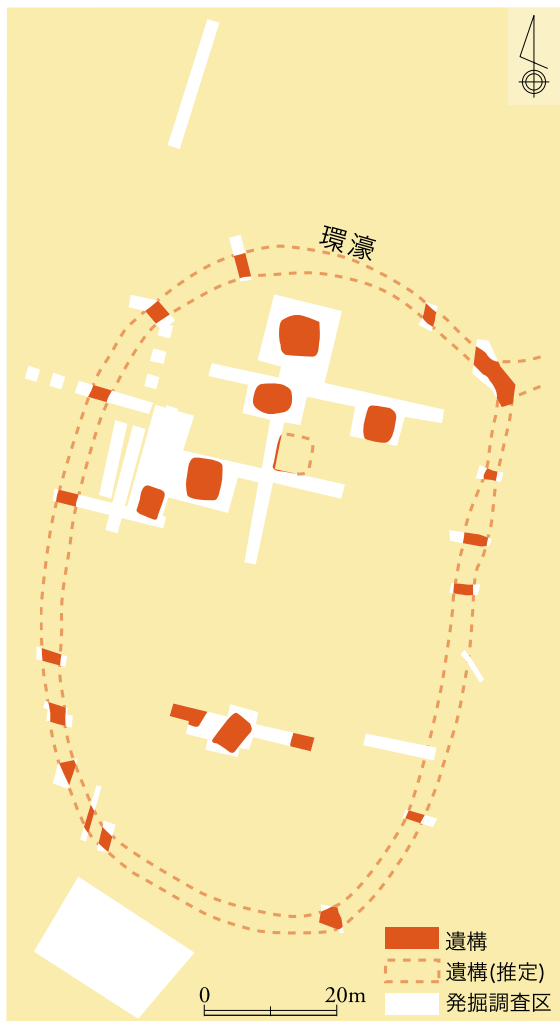
また、周辺で墓域の存在を確認するための調査をしていますが、今のところ、その痕跡は見られません。

これらのことから、神崎遺跡は三遠地域から移住してきた人々のムラであり、墓域が形成されていないことから比較的短期間で廃絶したと考えられます。他地域から移住してきたことがはっきりとわかることと、遺跡の遺存状態が非常に良好なことなどから、2011年2月に国史跡に指定されました。





V-1



V-2



V-3

V-1 | 空から見た発掘中の神崎遺跡（北半）  
綾瀬市教育委員会提供。

V-2 | 神崎遺跡の全体模式図  
綾瀬市教育委員会原図。

V-3 | 神崎遺跡で見つかった竪穴住居址  
綾瀬市教育委員会提供。

V-4-9 | 神崎遺跡から出土した土器  
東三河、西遠江の土器とそっくりだが、これらは  
地元の粘土で作っている。



V-4 | 大形壺



V-5 | 壺



V-6 | 台付鉢



V-7 | 台付甕



V-8 | 小形壺



V-9 | 高坏



# 神崎遺跡とその周辺の遺跡

神崎遺跡の周辺には、性格の異なったいくつかの遺跡が存在しています。相模川流域に分布するこれらの遺跡には、各地の影響を受けた土器が認められますが、共通しているのは三遠の土器を含む点です。また、花水川・金目川流域では東遠江の菊川式土器が認められ、人々の移動に棲み分けの意識がはたらいっていたことも考えられます。

**近距離、遠距離、色々な地域の土器** **宮の里遺跡** **本郷遺跡** 在地の土器に混じって存在する各地の土器

**東遠江の影響を強く受けた土器** **三ノ宮・前畑遺跡** **岡田遺跡** 尾張・三河の土器を忠実に模倣した土器

**神崎の土器とそっくりな土器** **伊場遺跡群** 神崎ムラの移住者はこのあたりから来た!?

伊場遺跡群

| 遺跡名          | 弥生時代     |   |     |   | 古墳時代 | 環濠 方形周溝墓 |     | 土器                                 |
|--------------|----------|---|-----|---|------|----------|-----|------------------------------------|
|              | 前 IV     | 後 | 前 V | 後 |      |          |     |                                    |
| 相模川水系<br>相模湾 | 1 神崎     |   |     |   |      | あり       | なし? | 三遠が主                               |
|              | 2 本郷     |   |     |   |      | あり       | 多   | 在지가主 三遠 + 多地域 (北陸~北関東)             |
|              | 3 倉見才戸   |   |     |   |      | あり       | 不明  | 在지가主 三遠                            |
|              | 4 岡田     |   |     |   |      | なし       | あり  | 在地 尾三<br>(*墓域のみ検出。付近に居住域の存在が推定される) |
|              | 5 宮の里    |   |     |   |      | あり       | 不明  | 在지가主 三遠 + 他地域 (特に東京湾)              |
| 花水川水系<br>東京湾 | 6 柳屋敷添   |   |     |   |      | あり       | 不明  | 在地 三遠                              |
|              | 7 三ノ宮・前畑 |   |     |   |      | 不明       | 不明  | 在지가主                               |
| 赤坂           |          |   |     |   |      | なし?      | あり  | 在지가主                               |
| 三遠           | 伊場       |   |     |   |      | あり       | 多   | 在地 (三遠)                            |

V-10 | 神崎遺跡周辺の遺跡から出土した土器の概観と各遺跡の消長。地図と表の番号は一致する。

## 伊場遺跡 静岡県浜松市中区、南区

伊場遺跡は、隣接する城山遺跡・梶子遺跡・梶子北遺跡・中村遺跡とともに伊場遺跡群としてみると、東西・南北とも1kmを越す、西遠江（現在の静岡県西部）を代表する大遺跡です。遺跡群は海岸平野と呼ばれる低地の最も北側に位置します。東西に延びる砂堤列があり、その間の低湿地にできた標高2～3mの微高地に多くの住居や方形周溝墓がつけられました。弥生時代ではⅢ～Ⅴ期が中心になります。

Ⅴ期の土器は伊場式土器とも呼ばれ、かながわでもしばしば発見されるなじみの深い土器の一つです。その特徴は、壺は櫛描文を多用し、腰の部分が稜をなして屈曲します。甕は脚台がつく台付甕で、脚台部の上端に接合部を補強するために、通称ハチマキと呼ばれる粘土紐が回っています。高環の環部には波状文が、脚部には直線文が巡り、脚の端は厚く三角形になっています。

V-11-14 | 伊場遺跡から出土した土器  
西遠江に分布する伊場式土器。神崎遺跡の土器とよく似ている。



V-11 | 壺



V-12 | 高環



V-13 | 台付甕



V-14 | 台付鉢

## 本郷遺跡 海老名市本郷

相模川とその支流目久尻川との間の標高22～25mの台地上にあります。北側にIV期の方形周溝墓群が見つっていますが（本郷中谷遺跡<sup>ほんごうなかやつ</sup>）、それを除くと本郷遺跡はほぼV期から古墳時代前期にかけて営まれた遺跡です。居住域は、環濠の外側にも広がっており、その東側は数ブロックに分かれた、V期以降の方形周溝墓からなる墓域となっています。北東1.5kmの至近距離にある神崎遺跡では東海地方の土器がほとんどでしたが、この遺跡の土器の主体は在地のものです。しかし、少量ながら東海地方を始めとして他地域の土器も出土しています。この傾向はV期後半以降、古墳時代にまでみられることから、長期間にわたる継続的な他地域との交流があったことがわかります。

V-15-19 | 本郷遺跡から出土した土器



V-15 | 壺



V-16 | 壺



V-17 | 壺



V-18 | 高杯



V-19 | 台付甕(脚台部)



## 宮の里遺跡 厚木市船子

相模川の支流、玉川と恩曾川おんそがわに挟まれた台地の先端部に位置し、東2kmには相模川が南流しています。台地頂部は標高40m前後で、二重に巡る環濠の外側下部は32mとかなり高低差があります。IV期（竪穴住居7軒）の遺構も認められますが、竪穴住居（195軒）、環濠2条、その内側の溝などほとんどはV期に属します。

V期の出土遺物の大半は土器ですが、その中で特徴的なのは、東京湾沿岸にみられる土器が比較的まとまっていること、また西遠江といったかなりの遠隔地のものだけでなく、北関東や東関東のものも認められることです。

V-20-22 | 宮の里遺跡から出土した土器



V-20 | 壺



V-21 | 壺



V-22 | 高坏

## 三ノ宮・前畑遺跡 伊勢原市三ノ宮

三ノ宮・前畑遺跡さんのみや まえはたは、丹沢山地の裾部の標高65～68mの、遺跡の南側を流れる栗原川が形成した河岸段丘上にあります。

この遺跡が注目されるのは、西駿河の菊川式土器の影響を非常に強く受けた土器群が出土したことです。菊川式土器の壺には、大きく口を開くものと、内彎ないわんぎみに立ち上がるものの二者があります。前者は肩に段をもち、そこにハケ状工具（板の小口）を連続的に突き刺した文様をつけます。また、胴から底にかけての屈曲が強く、そこに横方向の丁寧なミガキを施すという特徴があります。在地でつくられたものですが、こうした菊川式土器の特徴をもっており、西駿河地域との関連がうかがえます。

V-23-25 | 三ノ宮・前畑遺跡から出土した土器



V-23 | 壺



V-24 | 高坏



V-25 | 台付甕

岡田遺跡 寒川町岡田

岡田遺跡は、相模川の支流、<sup>こいで</sup>小出川と目久尻川に挟まれた標高 23～26m の丘陵上にあります。調査区の南端からV期の方形周溝墓が4基発見されました。そのうち、4号方形周溝墓の溝のコーナーから出土した壺は、尾張・三河で「パレススタイル」と呼ばれる、独特の美しい形態と赤色顔料で彩色した土器をかなり忠実に模倣したものでした。本場の土器と違う点は、白い化粧土を塗っていない、口縁部内面の羽状をなす刺突が浅く細い、外面の山形文の上下に巡る列点<sup>やまがたもん</sup>が厚みのないハケ状工具を使ったために本来の涙形になっていない、などです。しかし、一目見て誰もが「パレススタイル」とわかる仕上げになっています。尾張・三河地方との交流をうかがわせる土器です。

V-26-27 | 土器出土状況  
玉川文化財研究所提供。

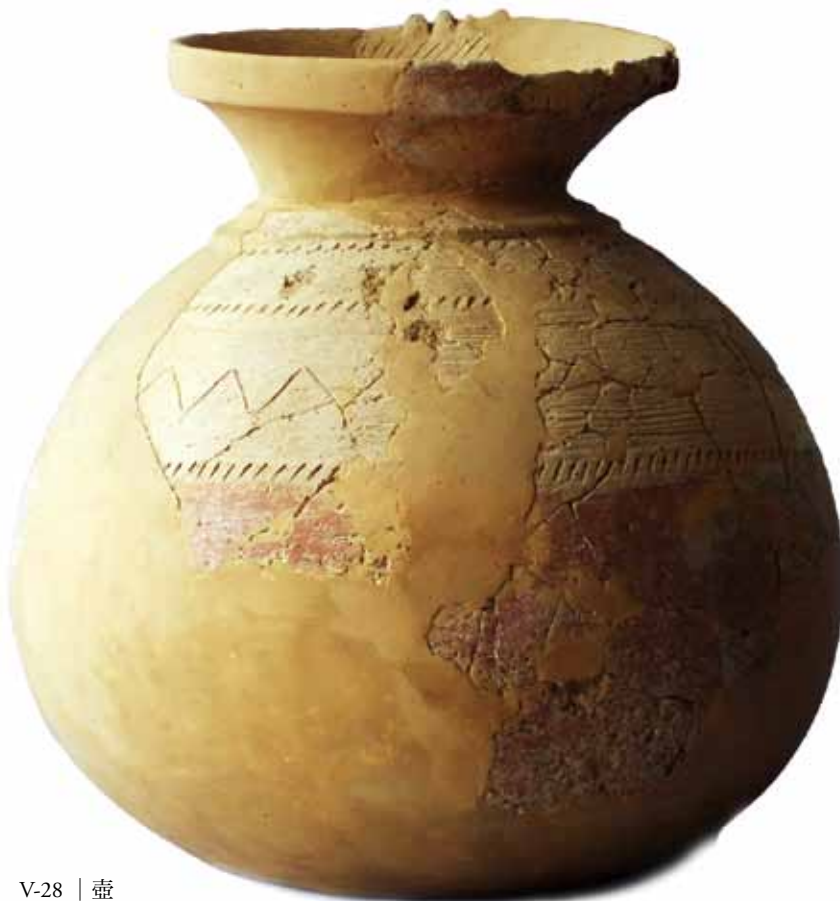
V-28 | 岡田遺跡から出土した土器



V-26



V-27



V-28 | 壺



口縁部の内面



山形文と列点文



## VI 共通する世界観 — 絵画土器 —

縄文時代には土偶や人・動物の顔をかたどった土器の取っ手などがありますが、弥生時代になると、土器にヘラで動物や器物を描き込むことが行われます。絵の題材として圧倒的に多いのが鹿です。銅鐸に描かれた絵画においても、一番多い題材はやはり鹿です。かながわでも5遺跡から鹿などが描かれた絵画土器が出土しています。

### かながわの絵画土器

小田原市久野に所在する山神下<sup>やまのかみした</sup>遺跡からは、IV期の方形周溝墓が3基検出されています。そのうち3号方形周溝墓から矢印のような記号が描かれたものと、鳥か動物とみられる絵が描かれた壺が出土しました。

そのほか4遺跡から鹿の絵が見つかっています。一番よく知られているのは1948年に発見された藤沢市稲荷台地<sup>いなりだいち</sup>遺跡群引地脇<sup>ひぎじわき</sup>遺跡第一地点のもの

VI-1 | 引地脇遺跡出土土器

VI-2・3 | 山神下遺跡出土土器

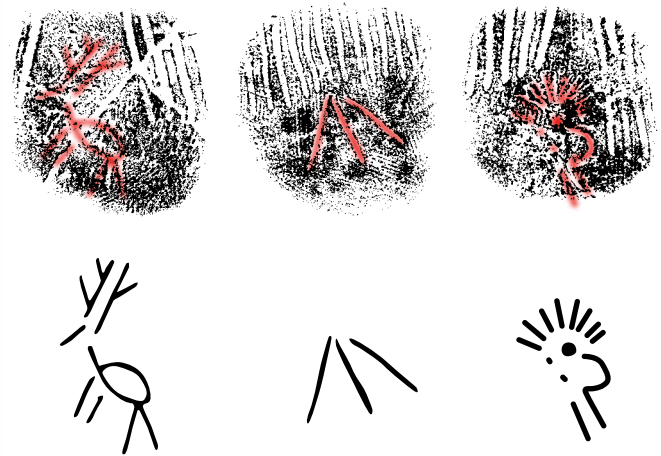
VI-4 | 小船森遺跡出土土器

VI-5 | 折本西原遺跡出土土器  
安藤広道氏原図

VI-6 | 藤林遺跡出土土器  
渡辺務氏原図



VI-1



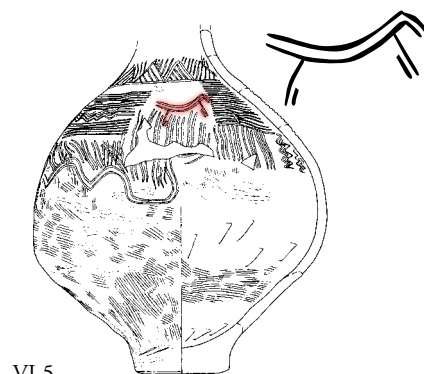
VI-2



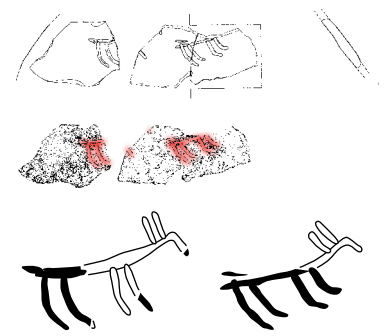
VI-3



VI-4



VI-5



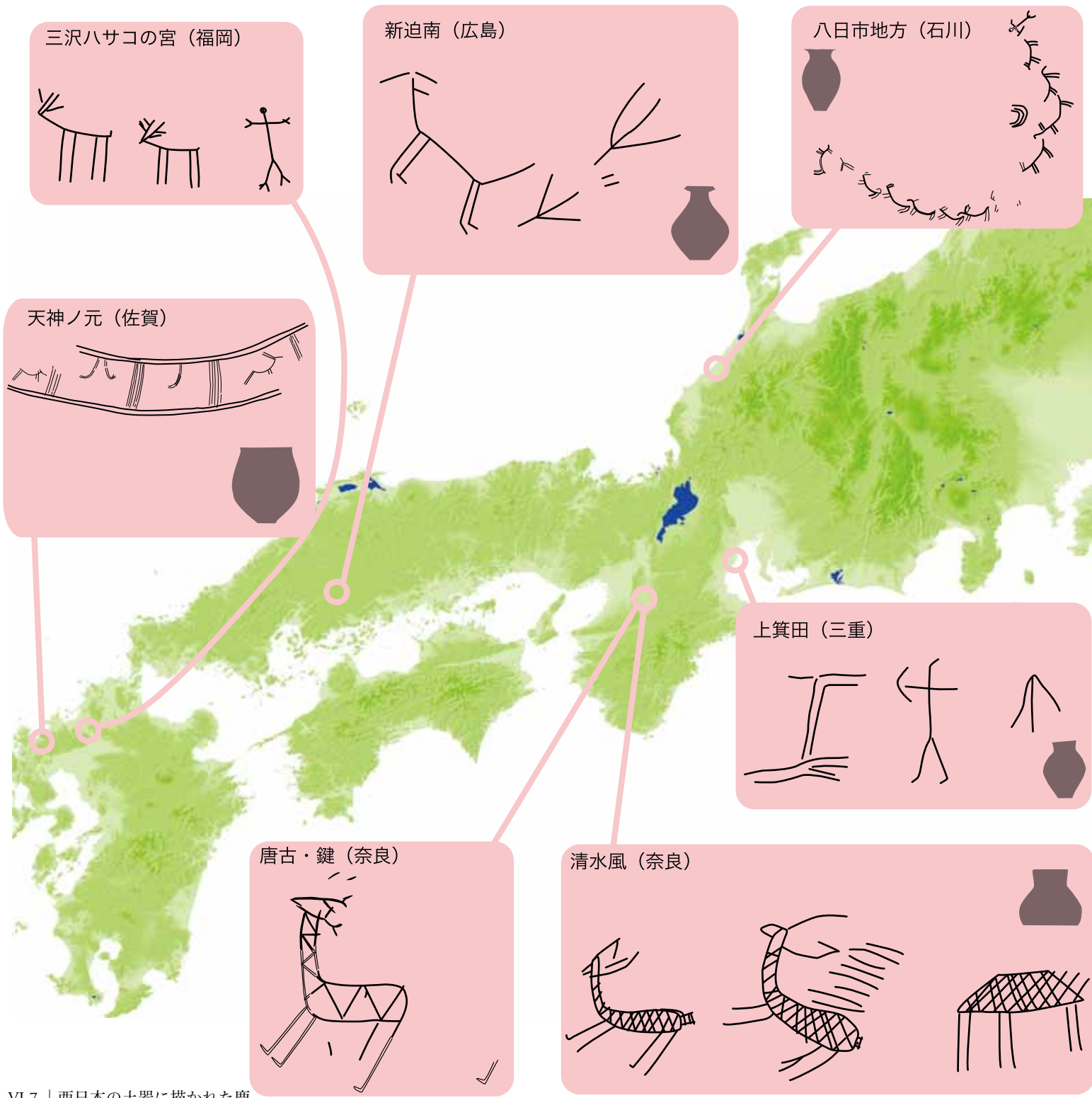
VI-6



です。鹿と人？と矢印という組み合わせがみられます。人が矢で狩りをす  
るところを表しているのでしょうか。

横浜市緑区藤林遺跡から出土した壺には2匹の鹿が描かれていました。  
横浜市都筑区折本西原遺跡出土の壺には鹿が描かれていましたが、文様を  
描いた順番などを詳細に観察すると、鹿を描く場所を決めてから他の文様  
をつけていることが分かります。これらはすべてIV期のものです。

小田原市小船森遺跡の土器は、鹿と矢を射掛ける人？が描かれています。  
この土器が壺ではなく甕であることとV期末のものであるという点で他と  
は異なっています。



VI-7 | 西日本の土器に描かれた鹿

## 各地の鹿が描かれた土器

最も古い弥生時代の絵画土器は、佐賀県天神ノ元遺跡、福岡県吉武高木遺跡・三沢ハサコの宮遺跡・大板井遺跡のⅠ期末からⅡ期初頭の甕棺で、鹿が描かれています。

最初に絵画土器が注目されたのは1923年のことで、奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡から出土したⅣ期の鹿の絵でした。奈良県をはじめ西日本ではⅣ期に絵画土器が多く作られました。その中にはかながわの引地脇遺跡と同じ意匠のものがみられます。鹿・人・矢やそれに準じる組み合わせは、広島県新迫南遺跡（Ⅳ期）や三重県上箕田遺跡（Ⅴ期）などいくつか確認されています。複数の矢を射掛けられるだけでなく（清水風遺跡・Ⅳ期）、犬に追われる鹿の群れ（石川県八日市地方遺跡・Ⅳ期）などもあります。

鹿の角は毎年生え変わり収穫季節である秋に抜け落ちることから、稲との結びつき、再生のシンボルや地霊の象徴として土器に描かれたと考えられています。集落形態や水稲耕作、道具の製作・使用などの技術的・物質的なものだけでなく、このような世界観や象徴性なども一緒に、かながわにもたらされたと考えられます。

### ■主な参考文献

田中 琢ほか編 2002『日本考古学事典』三省堂 | 佐原 眞編 2002『古代を考える 稲・金属・戦争 - 弥生 -』吉川弘文館 | 西本豊弘編 2006～9『新弥生時代のはじまり』1-4 雄山閣 | 岡本孝之ほか 2007『大磯町史 10 別編 考古』 | 設楽博己ほか編 2008-11『弥生時代の考古学』1-9 同成社 | 石川日出志 2010『農耕社会の成立』岩波新書 | 甲元眞之ほか編 2011『講座日本の考古学 弥生時代』上・下 青木書店 | 武末純一ほか 2011『列島の考古学 弥生時代』河出書房新社 | 森岡秀人 2001「弥生時代遺跡の年代」『季刊考古学』77

### ■写真・図の提供・出典

I-1 谷口 肇 1991「神奈川『宮ノ台』以前」『古代』92 を改変 | I-4・5 安藤広道氏提供 | I-6 神奈川県教育委員会 | II-1-4 玉川文化財研究所提供 | II-5 戸田哲也 2000「中里遺跡の調査」『平成 12 年小田原市遺跡調査発表会 中里遺跡講演会 発表要旨』を改変 | II-7 篠宮 正 1996「弥生時代中期中頃から後半の土器」『玉津田中遺跡 第 6 分冊』兵庫県文化財調査報告 135-6 を改変 | II-14 神奈川県立歴史博物館 | III-1 三浦市教育委員会提供 | III-12・13 かながわ考古学財団提供 | III-26・27 神奈川県教育委員会 | III-31 岡本孝之 2003「茨城県における弥生文化観の再検討」『茨城県史研究』87 を改変 | IV-1 設楽博己 2005「側面索孔燕形銚頭考」『海と考古学』六一書房を改変 | IV-2-5 神奈川県立歴史博物館 | V-1 綾瀬市教育委員会提供 | V-2 井上洋一 2010『神崎遺跡範囲確認調査報告書』綾瀬市埋蔵文化財調査報告 7 を改変 | V-3 綾瀬市教育委員会提供 | V-4-9 神奈川県立歴史博物館 | V-26・27 玉川文化財研究所提供 | VI-2・3 林原利明 1989『山神下遺跡』 | VI-4 小池 聡 2002『小船森遺跡』小田原市教育委員会 | VI-5 安藤広道 1999「弥生土器の『絵画』と文様」『古代』106 を改変 | VI-6 渡辺 務 1999『藤林遺跡』日本窯業史研究所 | VI-7 [唐古・鍵遺跡] 藤田三郎ほか 2008『唐古・鍵遺跡 I』田原本町文化財調査報告書 5・[清水風遺跡] 井上義光 1989「清水風遺跡」『奈良県遺跡調査概報』1986 年度 第一分冊 奈良県立橿原考古学研究所・[八日市地方遺跡] 宮下幸夫・橋 雅子 1997「八日市地方遺跡出土の絵画土器」『みずほ』21・[新迫南遺跡] 加藤光臣 1979「新迫南遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会・[三沢ハサコの宮遺跡] 片岡宏二 2002『三沢ハサコの宮遺跡 III』小郡市教育委員会・[天神ノ元遺跡] 仁田坂聡 2004『天神ノ元遺跡 (3)』唐津市教育委員会・[上箕田遺跡] 仲見秀雄 1961『上箕田』三重県立神戸高等学校郷土研究クラブをそれぞれ改変  
上記以外は担当が撮影、作成した。I-1・II-6・III-31・IV-1・V-10・VI-7 の地図の作成には「カシミール 3D」を使用した。

展覧会の開催にあたり、次の機関・方々から多大なご協力をいただきました。〔順不同、敬称略〕

(公財)かながわ考古学財団 (公財)横浜市ふるさと歴史財団(埋蔵文化財センター・横浜市歴史博物館・三殿台考古館) 藤沢市教育委員会  
逗子市教育委員会 三浦市教育委員会 伊勢原市教育委員会 海老名市教育委員会 綾瀬市教育委員会 寒川町教育委員会 浜松市博物館  
(株)玉川文化財研究所 明治大学博物館 赤坂遺跡調査団

相原俊夫 安藤広道 飯塚美保 池田 治 石川日出志 石丸あゆみ 井上洋一 宇都洋平 大島慎一 岡 潔 加藤久美 菊池信吾  
加藤信夫 金井紋子 河合英夫 忽那敏三 久野正博 今野まりこ 小林秀満 佐藤仁彦 鈴木重信 諏訪間伸 高橋 健 武内啓悟  
立花 実 戸田哲也 中村 勉 橋口 豊 橋本昌幸 平本元一 諸橋千鶴子 山口 博 渡辺千尋 渡邊直哉



